

る必要がある。そうして始めて古人の人となり、詩や書の意味が理解できるという。

重要なのはこの後である。古代に留まったままでも、現実から逃避して一時的に自分の心が癒やされることはあるであろう。しかし、古人に友として認めてもらうには、また自分が生きている現代まで戻ってきて、古人今ありせばどのようにするであろうかと考えなければならない。古典の中に自分を見て、自分の中に古典を見る。現代の世界に身を置きつつ古典的なものを取り込み、古典の世界に分け入りながら、現代へとつながる線を見つける。過去をただ懐かしむのでもなく、新しい時代を否定するのでもなく、時代のはざまで自分の立ち位置を見つけ、そこから現在と未来を逆照射してみる。『論語』の有名な「温故知新」(為政)である。渋沢栄一もこの条の解説の中で、伝統的な考え方と欧米の新しい考え方の両方とも生かすような形でどうバランスをとるかが今日的課題であると述べている(『論語講義』)。東洋哲学的な概念で言えば、「中庸」の追求と言ってよい。新井白石もこのことをとくに強調した。白石は、「天下有用の学」に心を惹かれ、徳川家宣に奉った「進呈の条」の中で、「いにしへを知るといへども、今を知らざれば所謂春秋の学にあらず」と力説している。江戸幕府の教育の中心、昌平黉の教授であった佐藤一斎も、「分を知り足るを知るは、過去を忘れざるに在り」(『言志晩録』)と言ひ、古典を通して過去を知る重要性を喚起した。そして読書も心学だとし、冷静、沈着、入念、謙虚な態度で読むべきだと言ひ、孟子の「尚友」に対して次のように説いている。

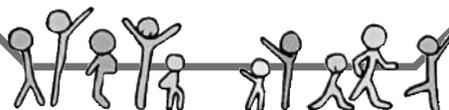
孟子、読書を以て尚友と為す。故に経籍を読むは、即ち是れ嚴師父兄の訓を聴くなり。史子を読むも、亦即ち明君賢相、英雄豪傑と相周旋(応接の意)するなり。其れ其の心を清明にして以て之に對へざるべけんや。(『言志後録』)

一斎の解釈には、中国における経学成立以降の考え方、及び江戸時代の幕藩体制の影響が色濃く窺われ、教師と生徒、父と子、君と臣など、縦の関係が強く打ち出されている。しかし縦の関係では古典を撫でることは困難である。孟子の場合は、善士と善士の関係、いわば横の関係

であった。友人との関係については、孔子も、「子曰く、己に如かざる者を友とするなかれ」(学而)のように、重要なテーマとして取り上げ、その関係について、「朋友と交わりて信ならずや」(学而)のように、お互いの信頼関係が基礎にあるとする。「尚友」は、基本的には横の関係であり、気が置けない、信頼に裏打ちされた関係である。これなら古典を撫でることができる。古典を撫でて学ぶ中で現代に通じる水脈を探り出し、現代において自分の立ち位置を考える。いい立ち位置を見つけ、きっと古典も褒めてくれるだろうと思えたとき、私は古典に撫でられた気分になる。私が古典を撫でたり、古典が私を撫でたりするのは、お互い敬意を表しつつ信頼に裏打ちされた友人関係があるからである。

漢詩を「撫でて」 みませんか？

文学部 三野 豊浩



中国の古典文学が専門なので、一筆書かせていただくことにした。

古典を「撫でる」というのは、実に面白い表現だと思う。今では死語かも知れないが、『詩経』に由来する「切磋琢磨」という四字熟語がある。玉や石を刃物で切り、やすりでこすり、槌で打ち、砥石で磨くように、日々努力精進することをさす。少なくとも、かつては定番の四字熟語だった(ように思う)。そのように、私の感覚からすると、漢詩や漢文というものは決して「撫でる」ものではなく、一文字一文字、ノミか何かで彫ったり、削ったり、刻んだり、あるいは挟ったりしながら読み解くものである。ある程度の専門家にとっても、漢字の手ざわりは決して仮名文字のように柔らかいものではなく、基本的に固くごつごつしたものである。そんな漢字ばかりで書かれた文献を読み解くことは、ある意味で大きな石のかたまりを相手に悪戦苦闘しているにも等しい。しかしそれだけに、古典を「撫でる」という表現に興味をひかれた次第

である。つい前置きが長くなった。

とはいうものの、そこは何といっても悠久の歴史を誇る中国である。何千年にも及ぶ時間の中で蓄積されて来た膨大な文献の、一体どれだけを自分はちゃんと読んでいるだろうか。一生懸命に研鑽したつもりでも、果たして本当に「刻んだ」と言えるほどの業績が自分にあるだろうか。私の仕事など、それこそ岩のような古典の表面を軽く「撫でた」程度に過ぎないのではないか。そう思うと、何だか無力感にとらわれてしまう。

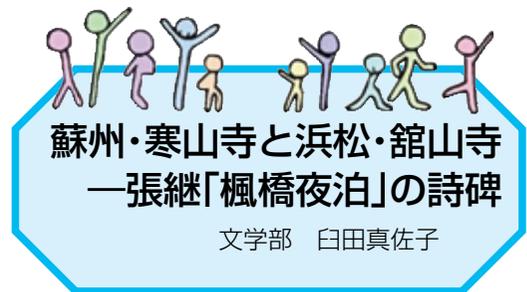
閑話休題。かつて所属していた中国語中国文学専攻が廃止となり、無念やる方ない思いをしたのは、そう遠い昔の話ではない。専攻の維持に必要な学生が集まらないことが廃止の主な理由だったが、その時はこれも時代の趨勢とあきらめざるを得なかった。万事スピーディーで効率重視の現代社会にあっては、ゆっくり時間をかけて難しい漢詩や漢文を学びきわめたところで何になろう。実用性のない不要不急の専攻に人が集まらなくても仕方がない。そう自分に言い聞かせたものだった。

だが、「今の若い人たちは漢詩や漢文にまったく興味が無い」と決めつけてしまうのは、早計だったかも知れない。専攻は失ったが、現在私は豊橋校舎で主に初級中国語と初級中国文学の科目を担当している。毎週火曜日の午後に「古典の世界」という共通科目があり、ここ数年同じテキストを用いて「春眠 暁を覚えず」といったポピュラーな漢詩の話をしている。その受講生が年々増加傾向にあり、今年度は110名を超える学生たちが私の講義に集まってくれているのだ。何とも喜ばしい限りである。だが待てよ、これは一体どういうことなのだろうか、とふと考えてみた。もしかすると、かつての私のように中国の古典をとことん究めたいなどという学生がほとんどいなくなった一方で、それこそ「撫でる」程度になら漢詩に親しむのも悪くないかな、と考えている学生は、案外少なくないのかも知れない。それならそれでまことに結構。若い諸君には、是非とも価値ある古典に親しんでいただきたいものである。こちら元気でいられる間は紹介の労を惜しまないので。

最後に。自己宣伝めくが、このほど初めての

単著を幻冬舎ルネッサンス新社という所から出していただけることになった。タイトルは『范成大詩選』。秋頃発行の予定である。一般に漢詩の中で最も人気があるのは唐代(618~907)の詩で、私も授業では主に唐詩を扱っている。それに比べ宋代(960~1279)の詩はそれほど人気がなく、紹介される機会も少ない。宋代はさらに前半の北宋と後半の南宋に分けられるが、南宋は北宋以上にマイナーである。范成大(はん・せいだい 1126~1193)はその南宋の重要詩人の一人であるが、これまでその作品が一冊にまとまった形で紹介される機会がほとんどなかった。そこで自分なりに彼の詩を読み込み、試行錯誤の末、その成果をまとめてみた次第である。全部で五つの章から成り、詩人の生涯をたどりながら、各時期の代表的な作品を紹介して行く。ある程度専門的な内容も含まれているが、一般の読者にも面白く読んでいただければと思い、なるべく親しみやすい作品を選び、通常の訳注の他に七五調の自由訳を添えるなど、工夫をこらしたつもりである。少しでも多くの人に范成大という人物とその作品を身近に感じていただければ幸いである。書く方はそれこそ身を「削る」思いで執筆にあたったが、「撫でる」程度にでも楽しんでいただければと思う。

とりとめない雑談のようになってしまい恐縮である。字数制限もあることゆえ、こらで筆を擱くことにしたい。



豊橋校舎で「言語と文化」という共通科目を担当しており、テーマは中国の言語と文化です。受講生は中国の言語や文化に興味があつて選択したとは限りません。むしろそれとは逆、あまり興味はないけれど、履修することにしたという場合も多々あります。もちろん中国には行ったことはないし、行く予定も今のところはなし。